

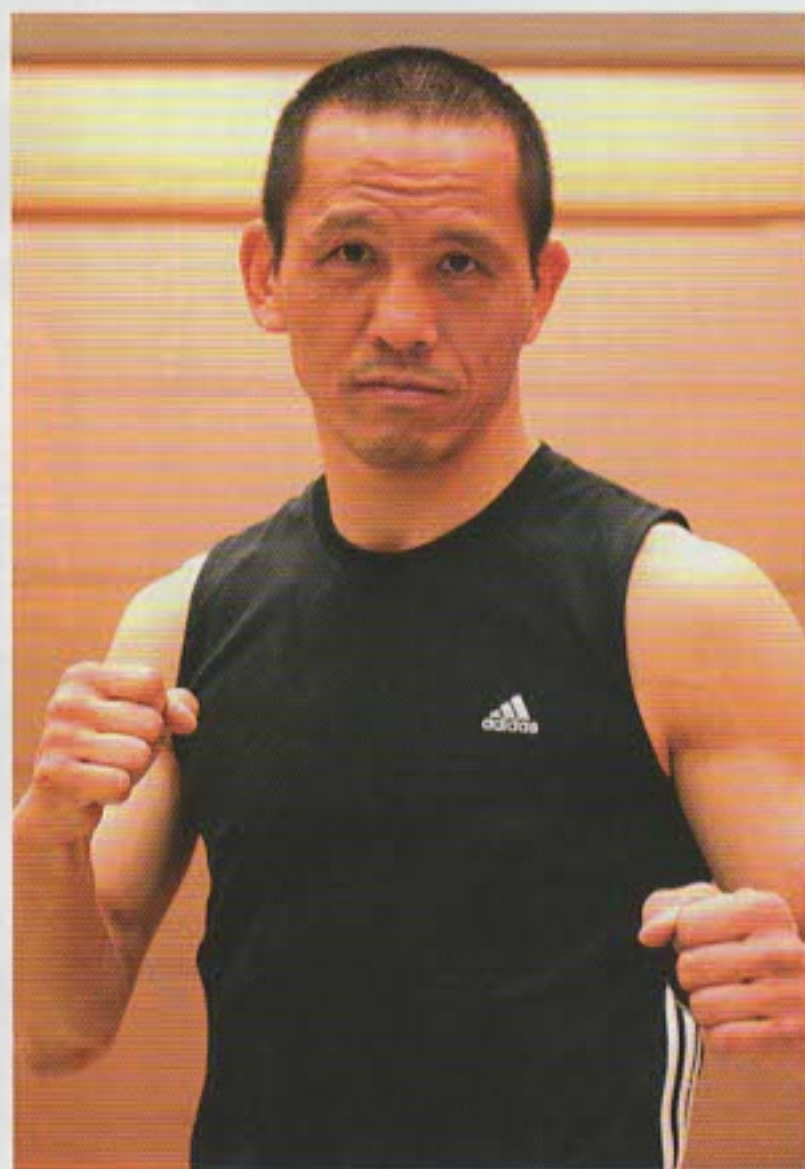
拳の履歴書

第三十四話

その後の「道」……井上 哲

～「格闘家」という生き方～

関 朝之



男は、大学に5年間通った後、1年の就職浪人をし、かねてより志望していた消防士の学校に入学した。そして、寮生活のため、10カ月間キックボクシングから遠ざかった。

晴れて消防士になった男は、東京郊外に位置する住宅都市の消防署に配属された。勤務形態は24時間サイクルで、1日置きに出勤する。ボヤだろが誤報だろうが、出勤日には毎日のように現場に駆け付けた。

10カ月のブランクを経て、キックボクシングの世界に舞い戻った男の復帰戦は、横浜にある屋台村に設置されたリングだった。

ジムの会長からは、対戦相手は「タイ人である」ということだけ聞かされていた。これまでタイ人と戦い、勝利した経験がある男は思っていた。そのような、決して華やかだとはいえない会場に出てくるタイ人なら、俺にも十分にチャンスはあるはずだ、と。

けれども、だった。男は、その試合の

タイ人選手が、後にミドルキックで対戦相手の腕を折るといふ伝説を作る強豪選手であることを知らなかったのだ。

試合は判定までもつれ込んだ。というより、男にしたら4ラウンド、よく持ちこたえたというのが正直な感想だった。蹴りの衝撃度は、これまでグローブを交えたどんな選手よりも強烈で、こっぴどくやられてしまった末の判定負けだった。

その試合が終わってからの打撲が酷かった。男は身体の節々の痛みを押し消して消火活動に専念した。

その後、男は、所属団体のライト級チャンピオンのベルトを腰に巻いた。さらには、その王座を返上して、スーパーライト級の王座にも輝いた。

けれども、男の目標は、試合をすることでも、王者になることでもなかった。ただただ、キックボクシングという道を歩いてきたのだ。その途上で、日頃の修行の成果の発表会が試合であり、チャンピオンとは「ナンバー1」の称号ではなく発表会に出場できる「資格」であり、その道を歩んできた自分に与えら

れた「努力賞」であったのだ。

私が初めてキックボクサー・井上哲に出会ったのは、2003年3月23日。早いもので、あれから決して短くはない歳月が、私の頭上を流れていった。

その日、私は東京・ディファ有明で行われた「MA日本キックボクシング連盟」の試合を取材記者として観戦していた。その帰路、最寄りの地下鉄のホームで、試合で敗れても花東の下に笑顔をつたえる井上に遭遇した。

格闘技界に明るくない私は、恐る恐る面識のない井上に声をかけてみた。すると、脂肪の極めて少ない表皮一枚で包まれている精悍な顔付きの男は、なんとも人懐こい笑みをこしらえて、私に話し返してくれた。

私は思った。なぜこの男は、試合で敗れても、こんな温かな表情を浮かべていられるのだろうか。もちろん、悔しいに違いない。しかし、そんなことを超越したこの独特の笑顔は、どこから来ているのだろうか、と。

「井上哲」というキックボクサーの笑顔の源泉を知りたくなった私は、数日後、東京・世田谷区の「下北沢」という私鉄の駅前で、井上と待ち合わせた。ここは、通称「下北」と呼ばれ、若者に人気のある町である。周囲を見渡すと、どこもかしこも青春の見本市のように、若者で溢れかえっていた。そこに井上は現れた。「いやあ。いまだにこの町には馴染めなくて……」

と、井上は面映そうに笑顔を見せた。そして、彼の半生を駅前の喫茶店で聞かせてもらった。

井上哲は、1966年、東京都練馬区石神井で生まれた。石神井は武蔵野台地の北西部に位置し、明治・大正期は近郊

農業地域で、練馬大根の産地であった。昭和初期以後は住宅開発が進んでいった土地である。

井上は一人っ子であり、その「哲」という名前は、「かっこいい人になるように」という想いを包含させて、祖父が名付けた。

井上は1歳から小学4年生まで、父親の仕事の都合によりアメリカ・ロサンゼルスで過ごした。幼少時代は社交性に乏しく、引込み思案だったという。

このカリフォルニア州最大の町で、井上は平日にはアメリカンスクールで学び、土曜日には日本語学校に通った。その空いた時間はベースボールに夢中になっていた。自らボールを握るかたわら、地元ドジャースを一途に応援していたのだ。

帰国して、地元・石神井の小学校に転校した井上は、日本語が中途半端にしかわからず、授業を理解することに腐心した。とりわけ「習字」という日本独自の教科は大の苦手だった。それでも、人種のグループ同士でいざこざが起こったアメリカンスクールに比べ、互いが理解し合える日本の小学校の雰囲気気に入っていた。

井上は同級生たちと作ったチームで野球を続けた。ポジションはバッテリー以外の全部を経験したが、韋駄天ぶりを発揮し、ショートとセンターを主に守っていた。翻せば、守備固めや代走が井上の活躍の場であったのだ。

中学校に入学し野球部に入った井上だ



かつて所属していたジムで、ミット持ちをして後輩を指導する井上

が、とりたてて野球の才に長けていたわけではない。ただ、野球が好きだったのだ。

当時、井上が通う中学校でも校内暴力が吹き荒れていた。しかし、そんなことは構いなしに、野球と勉強の3年間を送った。

高校に進んでも野球部に入った。都立高校だったが、練習は厳しかった。「水を飲むな」「うさぎ跳びをしろ」……。現在では不合理とされている練習に汗を流していた。

《同期の野球部員は20人ほどいました。しかし、野球のセンスに恵まれた者や、効率のいい練習方法を知っている部員ほど、早めに退部していきました。最後に残ったのは、ぼくを含めた5人でした。レギュラーになりたいのはやまやまでしたが、レギュラーになれなくても中学時代と変わらないスタンスで高校野球を続けていました。野球は今でも好きですね。その一方で、キックを本格的に始めるならば、自分が怪我をする覚悟が必要ですからね。やはり、自分が怪我をしないで、相手を負かすなんて考えてはいけません》

高校時代の野球での思い出を挙げようとしても、炎天下の練習中に「昨夜の夕立」が残っていた泥水を無性に飲みたくなったことくらいしかない。戦績は、井上が3年生のときに西東京大会のトーナメントで4回戦へ進んだのが最高であり、それが最後となった。このとき、部員は皆、泣いていた。しかし、井上は安堵していた。野球を高校でやめることは決めていたし、受験勉強もしたかった。それに次の目標を見据えていたからだ。

……

1年間の浪人の末、井上は都内の有名私大に合格した。その間、ランニング・腕立て・腹筋などのトレーニングを日課にしていた。大学に入ってから少林寺拳法を始めようと考えていたからだ。この想いは、少林寺拳法のバイブル的な書籍

を書店で手にとった高校2年生の頃から胸にあった。その本に記されていた技術よりも、思想が井上の琴線をやらしたのである。

大学の入学式の翌日、少林寺拳法部の部室へ向かっていった。キャンパスに飛び交う、テニスやスキーなどのレジャー系サークルの新生勧誘の声は異教徒の祈りのようで、井上の耳には届いていないものの、意識には響いてこなかった。井上は、華やかなキャンパスライフを謳歌しようとする学生と逆行するように、薄暗い地下にある扉をノックした。その日が、井上哲と格闘技のファーストコンタクトとなった。

《少林寺拳法部員は30人ほどいました。OBたちが体育会にしたいと申請していたのですが、昇格を見送られている同好会でした。だからでしょうか、部の雰囲気はリベラルでアットホームでした。少林寺拳法部での成績は、全国大会で入賞を果たしたことがありました》

また、井上は大学2年のとき、打撃技の究極を求めているうちに、キックボクシングに辿り着き、東京・世田谷区内のキックボクシングジムに入会した。以来、午前中に大学の講義を受け、午後からジムで練習して、夕方には大学の少林寺拳法部で汗を流す生活を重ねた。その後、部活を引退してから軸足をキックボクシングへと移行させていく。

……

1990年5月、後楽園ホール……。大学4年生、22歳の井上はキックボクサーとしてデビューした。青コーナリーに向かう花道では緊張感が背中に走った。対戦相手はすでに2試合をこなしていた。井上は遠二無二に前へ出ていき、判定で勝利をもぎ取った。それでも、キックボクサーとして戦っている自信が湧いてきたわけではなかった。逆に、恐ろしい世界に身を置いていることを悟った。なにしろ少林寺拳法と異なり、ヒジとヒザでの攻撃があり、やるかやられる



現役チャンピオンの頃も率先して後輩にアドバイスを送った

かの格闘技だということも身体で痛感したのだ。

2戦目も後楽園ホールで行われた。この試合ではノックアウト負けを食らった。それも1ラウンド目に、である。このときは、相手のパンチで倒れたきり意識が途切れてしまった。ノックアウトとは、どういふことを体験した。

《翌日、試合のビデオを見て、息の止まる思いがしました。ダウンを奪われ、横たわっているのは自分の立ち上がりだったんです。パンチで倒され、その後立ち上がり、相手に向かっていった。そして、再びパンチを食らい、ノックアウト負け……。つまり、カウントダウンの間に立ち上がり、ファイティングポーズを作り相手に挑んでいたのは、無意識の自分だったのです》

無意識のうちに戦うということは、これ以上の無防備な状況はない。井上はデビュー戦と2戦目で、異なる恐怖感を覚えたのだ。

その後、井上は、消防士学校に入学。寮生活のため、キックボクシングから遠ざかった。そして、消防士になり、キッ



腹に打ち、地道キックを打つ

クボクシングの世界に舞い戻った。横浜の屋台村のリングで、タイの強豪選手と試合をした。さらにチャンピオンベルトを腰に巻いた。

下北沢の喫茶店でインタビューを終えると、私は井上に連れられ、彼が所属しているジムに向かった。その途上、若者で賑わう洋品店や美容院が軒を連ねる表通りではなく、周囲の喧騒から取り残された乾物屋や八百屋が並ぶ薄暗い裏通りを案内された。

ジムに到着し、トレーニングを始めようとする井上の周囲には、衛星のように若者たちが集まってきた。井上の面貌には、あの独特の「哲スマイル」が浮かんでいた。

このときの井上はチャンピオンであった。王者と気さくに言葉を交わせることが、若い選手にとってどれほどの励みになることか。若者たちは、井上をこう評していた。

「面白くて、後輩によくしてくれる温かい先輩です」「試合に向けてきっちり仕

上げるプロ意識・調整方法・インサイドワークなど、すべての面での先生です」「どんな相手との対戦でも自分のペースを崩さない哲人です」「打たれても、打たれても前に出る試合スタイルは格好いいですねえ」

一方、井上は、自身をこのように見ていた。「天才肌の選手を目の当たりにすると、すごいなあと思えます。でも、そういう人たちはキックに見切りをつけるのが早いケースが多いです。その点、私は才能があるわけではなく、地道に長くやっているだけの選手です。」

キックボクシングといえば、一般人から見ると野蛮というイメージに直結するかもしれませんが、でも、私にとつてのキックボクシングは、格闘技であり、武道でもあります。そして一つの「道」と考えています。その途中に、たまたま試合という、日頃の修行の披露の舞台があるんです」

その言葉どおり、ジムでの井上は、準備体操と軽いシャドーパンチとキックを終えると、ミットを持って設置されているリングのロープを潜った。そして、若手のパンチとキックを受け始めた。

そんな光景に目をやりながら、私は思っていた。現役のチャンピオンでありながらミットを持つ。これが「井上哲」なのだ、と。

井上は、戦いの場がなくなっても、キックボクシングを続けていくという。試合が組まれないければ、グローブよりもミットを持つ時間を増やせばいいという考えなのだ。

「プロの世界では甘いのかもしりませんが、ナンバー一になりたいという野望を抱いたことはありません。自分を鍛え、高める一つの「道」として、キックを続けているのですから……。よく言えば根気強い。悪くいえば頑固なのでしょう」

あの日、ディファ有明での試合が判定負けに終わっても、地下鉄のプラットホームで見せてくれた「哲スマイル」の源

泉は、勝負を超越した「道」というスタンスにあった。勝つも負けるも、「道」を歩いているからこそ刻まれる足跡だったのだ。

井上と別れてから、私は「下北」のメインストリートを歩いた。昼間の喧騒が嘘のように静まりかえっているその情景を視界に収めながら、きつとこの街で「青春」を謳歌している若者たちは、いつかここから離れていき、またどこからか、次の世代の若者がやってくるのだから、と少しセンチな感傷にふけていた。そして、数日後、「あれっ?」と、井上のことを想起した。井上こそが、この「下北」で、随分と長い「青春」に身を置いている賢者ではないか、と。

井上から聞かせてもらったその半生に「道」というタイトルを付与して、今はない格闘技雑誌に掲載してから、5年という歳月が流れた。以来、私は井上と会っていなかった。ただ、いろいろな格闘技の試合会場に足を運ぶたびに、井上の格闘技へのスタンスを表した言葉は、少なくとも私の中でいつまでも輝きを放っていた。

「試合とは日頃の修行の成果の発表会」「チャンピオンとは、ナンバー一の称号でなく、大好きなキックボクシングのマッヂメーカーをしてもらえる資格であり、道を歩んできた自分に与えられた努力賞」

そんななか、パソコンをいじっているとき、偶然にも井上が代表を務めるキックボクシングの同好会「小鉄塾」のサイトにヒットした。井上は、まだ「道」を歩いていたのだ。私は、久しぶりに井上に会ってみたいとなった。咄嗟に携帯電話の番号欄を探すと、井上の携帯電話の番号が載っていた。その番号の留守録にメッセージを吹き込むと、折り返し井上から連絡があった。

こうして私は、奇しくも井上と初めて



才能に恵まれているのは、選手としてよりミット持ちだと井上は自分を評す

会った日から丸々5年が過ぎた2008年3月22日、「小鉄塾」のこの日の練習が行われている、上石神井体育館を訪ねた。

上石神井駅を降りて、上石神井体育館に向かった。幾度か踵を巡らせたことがあるが、今回の「上石」はやけに生活に密着している落ち着いた街に映った。それは、心のどこかで井上と初めて会った「下北」と比べてしまっていたからかもしれない。

体育館の受付で武道場を教えてもらい、その入り口から道場を覗くと、手前でスローモーション動きを展開している中国拳法の教室と同じ空間で、6人ほどがキックボクシングの首相撲の練習をしていた。そのなかに、5年前と変わらぬ精悍な表情の井上がいた。それぞれが使用しているグローブには「小鉄塾」と記されている。練習メニューが進むと、井上はミットを持ち、練習の参加者たちのパンチやキックを受け始めた。

5年の歳月は、キックボクシングに関する井上の環境を変えたに違いない。それでも、私の目の前で繰り広げられている「井上哲のミット持ち」は、「下北」のジムで見たときと同じようにエネルギーギッシュなものであった。

塾の練習が終了し、参加者の声を拾ってみた。

「今日で、2回目なんです。練習はハー



「選手としてあんな人のミット目がけて打ちたい」と思わせるようにミットを持つ井上。そこからプロ部員号選手も輩出した

ドです。井上先生は熱血漢です。家が近くなので、ダイエットのために通っています」

「井上さんは、信頼が置ける人です。ぼく自身も他の所で指導をしているのですが、昔、所属していたジムからのお付き合いなので、少しでもお力を貸せたらと思いい、こういう形で練習にも参加させてください」

井上さんの魅力は、技術と根性、それと人柄です。（小鉄塾にも）「来い」と言われて行くのではなく、井上さんがやるなら「行きたい」と思えるような人です」

「前のジムで、後輩としてお世話になっていました。（井上さんは）元チャンピオンでもあり技術もしっかりしています。試合のセコンドに付いてもらっていました」

7

体育館そばのファミリーレストランで井上の話を聞かせてもらった。

「小鉄塾は2007年の10月から始めました。私は引退宣言をしているわけではないのですが、3年前に後楽園ホールで

試合をして以来、リングには上がっていません。それでも、この前、試合の話があったんですよ。でも、今は小鉄塾と仕事と、3歳と0歳の子どもがいるので無理だとお断りしたんです」

5年前、チャンピオンであった井上は、タイトルを奪われ、何戦かしたきり試合はしていない。その最後の試合が、今から3年前。井上がかつて所属していたジムは、女子ボクシングに力を注ぐようになった。頃を同じく、ジムの指導者の立場でもあった井上は、自身で指導できる場所を模索し始めた。ただ、井上は東京消防庁に勤務する公務員であるため、ジムを持つことはできなかった。そこで、営利活動とは一線を画す「同好会」という形を選択した。

「だったら、最強の同好会にしたいと思っただけです。指導のレベルは、他のジムに負けない自信はあるんです。ただ、本拠地がないだけであって……。技術と、今ある道具だけを財産としてやっていけると思っていたので、練馬区内の体育館内の柔道場や剣道場を使わせてもらっているんです。」

小鉄塾の名前である（鉄）には、私の名前も掛けてはいるのですが、強い気持ちを持ってほしいと。（小）には個々人という意味があり、いろんな想いを持った人たちに集まってほしいという願いが込められています。それで、塾という寺子屋的な要素を取り入れ、名前を付けました。だから、一見さんもOKなんです。入会金・会費は不要ですから、自由に練習してくれればいいんです。

所属ジムや連盟の垣根を越えて、どこかのジムに所属していても「たまに他の人と練習したいときには、自由に来いよ」というスタンスです。初心者から最高レベルのプロ選手など、どんな人が来ても対応していきたいですね。とにかく、練習をした人が来て汗を流す、キックの社交場みたいな空間にしたいです」

私は、井上に質問をぶつけてみた。



体一つで来たいときに来て練習する。それが小鉄塾のスタイルだ

「道はまだ、続いているのですか？」と。井上は、「私の場合は」と前置きして、こう答えてくれた。

「そもそも引退という言葉を吐く必要はないと思っています。それによって、復帰の可能性を潰してしまうわけじゃないですか。引退宣言をしなくても、復帰する機会がなければ、そのままフェードアウトすればいいわけですし……。試合をしないからといって、ばったりキックをやめてしまつては、何のためにやってきたのかわからない。キックで鍛えた根性は仕事でも生かせるのでしようが、それにしてもやめる必要性はありませんよね。試合は後から付いてくるもので、試合のためにキックをやっているわけではありませんから……」

井上の話を聞き終えた私は、レストランの前で、自ら搬送・購入をしている練習用具を自転車に括り付けている井上と別れ、駅へ向かった。その途中、井上が後方からやってきた。自転車で用具を括

り付けた井上は、挨拶をして「上石」の夜陰に消えていった。

「下北」から「上石」に舞台は移行したが、井上の歩みは、5年の時を経て、何ら変わっていなかった。彼の「その後の道」は、まだまだ続いていったのだ。井上の後ろ姿を見送りながら、私はぼんやりと、そんなことを思っていた。

（文中敬称略）

小鉄塾のホームページ
<http://homepage3.nifty.com/kotetsujuku/>



塾には井上を慕って、団体・キャリア・年齢などの垣根を越えた参加者が集う

関朝之（せきともゆき）

1965年生まれ。ノンフィクション・ライター。医療・介護・動物・農業・スポーツ・旅などをテーマに、同時代を生きる人々の人生模様を書き続けている。著書に『植村直己と氷原の犬アンナ』（ハート出版）／『きみからの贈りもの』『10人のノンフィクション術』（青弓社）など多数あり